

---

# 日本における土器編年と炭素14年代

---

## Carbon 14 Ages and Chronology of Potteries in Japan

春成秀爾

[要旨] 縄文・弥生土器の編年体系は、世界の先史土器の中でもっとも細密なものである。その基礎をつくった一人である山内清男は、層位学と型式学を駆使して縄文土器の編年に取り組み、1937年に、縄文土器型式を細別すると同時に、早期・前期・中期・後期・晩期に大別した。各時期は、関東・東北地方では平均5土器型式から成っていた。

以来、縄文土器の編年作業は、縄文文化研究の主流となり、各地でおびただしい土器型式が設定され、関東・東北地方では各時期が10型式近くに細別された。縄文土器の起源はさらに古くさかのぼり、しかも未知の土器型式が早期の初めの部分にいくつも存在することが明らかになってきたので、1962年に山内は早期の前に草創期を設定した。

縄文土器の編年に絶対年代をあてる作業は、炭素14 ( $^{14}\text{C}$ ) による年代測定によって1951年に始まった。炭素14年代の役割は、細別・大別した編年に実年代を与えること、日本列島内での異なる文化同士や、日本と直接的に結びつかない世界各地の文化とを比べるさいの目安を得るところに向けられた。その結果、縄文土器文化以前の「無土器文化」がヨーロッパの旧石器時代文化と年代的にほぼ併行すること、縄文土器の起源は10000年前ごろまでさかのぼることを明らかにするなど、大きな役割を果たした。

最近始まった加速器質量分析 (AMS) 法による炭素14年代測定は、精度において飛躍的な進歩をとげている。AMS法は放射性炭素のイオンの数を1個1個数える直接的な測定方法である。測定誤差は $\pm 20 \sim \pm 30$ 年であって、その精度の高さは、神奈川県箱根埋没スギや青森県三内丸山遺跡で実証されている。いま、考古学上の大きな問題を解決するために炭素14年代を積極的に導入する段階にいたっている。

三内丸山では、約500の竪穴住居跡の同時性が議論されている。この問題は、住居跡にのこされている木炭の年代を測定するならば、同時並存の住居とその数を判断する手がかりを得ることができる。弥生時代の開始や、前方後円墳の成立の問題に関して、東アジア世界の中でその政治的な契機を探るばあい、絶対年代の確定が前提となる。考古学的手法による絶対年代の推定と併行して、年輪年代と炭素14年代の測定作業が急務である。

## 1. 日本における土器編年の方法

更新世末から完新世にかけての、おおよそ1万年間にわたって、北海道から沖縄までの採集・狩猟・漁撈民が作り使った土器が縄文土器である。縄文土器の年代の変遷を明らかにした編年体系は世界の先史土器の中でもっとも細密なものと世界的な評価をうけている。その基礎をつくったのは山内清男、甲野勇、八幡一郎らの1930年代以来の仕事である。なかでも山内の業績は、その後今日にいたるまで大きな影響力をもちつづけてきた。土器を基準として年代の尺度を作り、それに基づいて生活文化・社会の変遷を追い、地域性を明らかにするというその研究方法は、縄文時代のみでなく弥生・古墳～江戸時代にまで活用され現在にいたっている。

水平に堆積する土層の下層に含む土器は古く上層に含む土器は新しいと認識する層位学と、形・紋様の漸進的な移り変わりをつかむ型式学を駆使して縄文土器の編年に取り組んだ山内は、最初の総括で、縄文土器型式を細別すると同時に、早期・前期・中期・後期・晩期に大別した (山